

別紙 1-1

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	甲	第	号
------	---	---	---	---

氏 名 金子 慎哉

論 文 題 目

Surgery trends for osteonecrosis of the femoral head: a fifteen-year
multi-centre study in Japan

(大腿骨頭壊死症の手術傾向：日本における 15 年の多施設研究)

論文審査担当者

名古屋大学教授

主 査 委員

岩 井 建 志 

名古屋大学教授

委員

葛 谷 雅 文 

名古屋大学教授

委員

平 田 仁 

名古屋大学教授

指導教授

今 釜 史 郎 

論文審査の結果の要旨

別紙 1 - 2

今回、厚生労働省の大腿骨頭壊死症（ONFH）研究班モニタリングシステムのデータを用いて、日本における ONFH 患者の手術時年齢、病型および病期における ONFH の手術療法の経時的傾向を評価した。その結果、若い患者の割合は減少し、高齢者の割合は有意に増加した。全体として骨切り手術（OT）は減少し、人工股関節置換術（THA）は増加した。若年者で OT を受けた患者の割合が減少し、THA を受けた患者の割合が増加した。高齢者でも同様の結果であった。また病型については壊死範囲の大きいタイプでは THA を受けた患者の割合が増加した。病期についてはより進行したステージでは OT を受けた患者の割合が減少し、THA を受けた患者の割合が増加した。この結果、日本の 15 年における傾向として手術療法では OT が減少し、THA が増加している傾向が判明した。

本研究に対し、以下の点を議論した。

1. OT は若年者に適応が多く、THA は高齢者に適応が多い手術である。ONFH 患者全体で若年者が減り、高齢者が増加したという報告がある。若年者の ONFH 患者が減った理由として、免疫抑制剤の進歩により ONFH に影響するステロイドの使用が減少した可能性を示唆する報告がある。ただし、本研究では 16 歳から 39 歳までの若年患者だけでも経時的に THA が増加していたことは明らかになった。また入院期間の比較では OT は THA より長い。昨今では日常生活と仕事への早期復帰が好まれる。そのため長期間の治療を要する OT が好まれないのかもしれない。
2. OT は難易度が高く、執刀する外科医も行われる施設も限られる。一方、ONFH に対する THA は以前と比較して成績が改善したとの報告は多数ある。THA で使用されるインプラントの素材やデザインなどの改良、手術進入法を含めた手術手技、合併症の予防法などの改善が長期的成績の改善に大きく寄与していると考えられる。THA の長期的な成績が良いとする報告が THA の適応をより拡大させた可能性がある。
3. OT の良好な臨床転帰と関節生存率は多くの研究で報告されている。OT にて良好な被覆と骨癒合が得られれば、自骨を温存でき、人工関節に伴うような脱臼やインプラント感染の合併症がない。そのことから厳密に適応を絞れば、症例は以前より少なくなるが、OT の意義は大きいと考えられる。ただし OT は高度な技術を要するため、行う施設が限られる。OT を必要とする患者を紹介できる環境を作ることが重要であると考えている。

本研究は ONFH の手術治療方針決定の一助となる重要な知見を提供した。

以上の理由により、本研究は博士（医学）の学位を授与するに相応しい価値を有するものと評価した。

試験の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号	氏 名	金 子 慎 哉
試験担当者	主査	若 井 建 志	副査 ₁	葛 谷 雅 文
	副査 ₂	本 田 仁	指導教授	今 釜 史 郎
(試験の結果の要旨)				
<p>主論文についてその内容を詳細に検討し、次の問題について試験を実施した。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 手術内容の経時的な変化の原因と思われる患者背景について 2. 手術内容の経時的な変化の原因と思われる手術要因について 3. 明らかにした手術内容の傾向に対する考えについて <p>以上の試験の結果、本人は深い学識と判断力ならびに考察力を有するとともに、整形外科学一般における知識も十分具備していることを認め、学位審査委員合議の上、合格と判断した。</p>				